健康と光線

発行所
〒153
東京都目黒区目黒
4－6－18
サナモア光線協会

年4回発行
会費年500円
電話 東京（03）
3793－5281
3712－5322

太陽に自然の恩恵を感じる人は健康に恵まれる（その1）

―不老長寿の霊薬―

サナモア光線協会
サナモア中央診療所
医学博士　宇都宮　光明

太陽を讃えよ

人類が無生物なら、あるいは太陽は不必要なものかもしれないが、人類とて生物界を構成する一員であるからには、太陽の支配下に生かされているのであり、太陽を抜きにして生きられないことは自明の理である。実際、太陽の恵みを受けた生物は、植物でも動物でも見事な成長を遂げるのである。

庭先や路傍の草花でも、日当たりの良いところのものは生き生きとし、日陰のものは弱々しい。朝顔や菊も、単に水をやり、枝ぶりを矯めてやるだけでは頼りない花しか付けないだろう。丹精して育て上げるとは、十分に太陽の恵みを受けさせることであり、そうすればこそ見事な大輪の花を咲かせるのである。

動物も同じである。日陰で飼育した鶏は卵を産まなくなるし、小犬は骨格が育たず立つことも出来なくなる。太陽の恵みが如何に貴いものかは、歴史的に見て、太陽に恵まれた日本の子供にくる病が殆どなかったことでも分かる。日本には恵まれた気候風土と美しい自然があり、その中で額に汗して生活していたからこそ、人々は何時も若々しく、病気を知らず、長命であった。

太陽に親しむ

太陽に親しむには日光浴をすれば良い。しかし日光浴を、日中、衣服を来たまま、顔と手を出して屋外に居ればよいと甚だ簡単に考えている人がいる。これは手先だけを海水につけて海水浴をしたと言う如きもので、太陽に親しむことにはならない。本当の日光浴とは、〝**全光線を全身に**〟でなければならない。日光浴は日なたぼっこと違うのである。

即ち、日光浴の要諦は

(1)なるべく皮膚を多く出し、

(2)太陽光線の直射を受けて紫外線を含む全光線を吸収する、

ことに尽きる。

ただ注意すべき点は、文明国の人は日光浴をする上では赤ん坊だと言うことだ。産まれた瞬間から産着を着せられ、文明人として一人立ちした生活は、日に当らないようになっている。暮らし向きは、衣服を身に付け、往来の行き来にも乗り物を利用し、皮膚を太陽にさらす機会は殆どない。その結果、日に触れる訓練が出来ていないので抵抗力がなくなり、海水浴に行ってもすぐに皮膚に炎症を起こし痛みを憶えるようになるのである。従って、最初は軽く準備的日光浴から始めなければならない。

話はそれるが国語辞典の言海によると、〝**はだか**〟は〝**膚赤**〟がつまった言葉であるという。この語源からも分かるように、日本人の先祖は太陽に親しみ、皮膚は日焼けして赤銅色に輝いていたのであろう。それが今や、膚白から膚青になってしまった。一億総半病人になって当然なのかも知れない。

不老長寿の霊薬

病気になりたくないし、年をとりたくないし、死にたくない、と思っても、固より実現する見込みのないことは誰でも知っているが、これを最後まで望んだ人に秦の始皇帝がいる。西暦紀元前二百五十年頃、中国大陸に割拠した戦国時代の群雄を平定し、萬里の長城を築き、大秦帝国を造り上げた始皇帝は、徐福に不老長寿の霊薬を求めさせた。徐福は東方に蓬莱という島（日本）があり、そこには不老長寿の霊薬があると聞いていたので、東方に向け船出したのである。

紀州の南端、和歌山県熊野の浦に着いた徐福は、不老長寿の霊薬を探し求めたが、その霊薬は草根木皮の類のものではなく、この国の恵まれた太陽や空気や水のような自然環境にあることに気付いたのである。そのため徐福は、とうとう国には帰らずに紀州の地に居ついてしまった。今でも徐福の墓は新宮市の近くに残っているが、不老長寿の霊薬は太陽に恵まれた環境にあったのである。

船大工

宇都宮義真撮影

各人の治癒力

宇都宮　義真

クスリの魔術

「病気はクスリを飲めば治る」、としたり顔に説く人がいる。事実、今の医療では、医師は殆どの治療にクスリを用いている。しかし、大半のクスリが対症療法の域を出るものでないことを医師は知っている。

医師を訪れる人々も、「イタミを取って欲しい」とか、「セキを止めて」とか、「肩コリを楽にして」とか言う。症状を取り除くことは熱心だが、原因から根本的に治してくれとは言わない。鎮痛剤でイタミを取っても治るとは限らない。セキが出るからといって無闇に鎮咳剤を使うのは、無意義なばかりでなく弊害を伴うことがある。肩のコリが一時的に楽になっても、根本的に治さなければまた起こす。

むしろ症状の多くは、病気を知らせるシグナルであり、治るために必要な生体の反応であって、無闇に症状を抑制する対症療法は、百害あって一利なきこともある。それでも病気はクスリを飲まなければ治らないと思い込んでいる人は多い。このクスリの魔術のからくりを支えているのは、人々が〝各人の治癒力〟に気付かないためである。

知的労働の対価

ある日本人がアメリカ滞在中にカゼを引いて医者にかかったら、「寝てれば治る」、と言われただけで高額の診察料を払わされた。すっかり頭にきた日本人は、悪徳医を訴えてやると弁護士に相談したら、「あなたは医師の診察を受け、指示に従って病気が治ったのだから、診察料は払わなければならない」、と言われた上、弁護士から高額な相談料を請求されたという話がある。

この話は、日本人が知的労働を評価する観念に乏しいことに言及する際にしばしば引き合いに出されるが、こと医療に関する限り、アメリカの医師の処置が正しいのである。しかし日本の慣習では、病気に効かないクスリでも出した方が金を取り易い。このからくりに気付かないのは、人々が〝各人の治癒力〟を過小評価しているからである。

ゆがめられた健康保険制度

クスリは何でも駄目だという気はないが、クスリを飲ませなくても治る病気にまでクスリを飲ませる必要はない。しかし医療の現場は少し違う。クスリだけでなく、注射の一本もうってやると、患者は喜んで財布のヒモをゆるめるのである。

その上、健康保険制度がきわめて唯物的なこともあって、医者はクスリのセールスマンの役目をしないと生活出来ない。そのため医療がクスリ販売業になり、なるべくクスリを使わずに治すのが名医であるという考え方は、理想論ではあっても通用しなくなった。このようなクスリ中心の医療が、医療を本質から破壊しつつあるとしても、医師と患者の間の信頼感をやっとつなぎ止めているからくりが〝各人の治癒力〟なのである。

身体の抵抗力

最近、世人はクスリによる対症療法の無力なることに気付き、漸く予防医学に目を向けるようになったが、随分見当外れのことをしている人が少なくない。例えば、感冒の予防に、マスクをして厚着をする人がいるが、感冒の原因は寒いからでなく、身体の抵抗力が弱いためである。人々が恐れる結核にしても、至る所にある結核菌に侵されない状態が真の健康体である。即ち、真の予防法は、身体を無菌的に保つことではなく、各人の身体の抵抗力を強くすることである。これこそ〝各人の治癒力〟の本体であるが、この〝各人の治癒力〟を強めるのが〝サナモア光線療法〟である。

「光と熱」
昭和9年1月15日発行
対症療法是か非か

「健康と光線」
昭和43年5月5日発行
医療の悲劇
を要約した。

最近の話題から

氾濫する紫外線UVカット関連商品

―宣伝広告を鵜呑みにしないために―

医学博士　宇都宮　光明

紫外線の特性を知る

筆者は、生態系は人知を越えて完璧なものと考えています。紫外線も、人類がオゾン層を破壊しない限り、益が遙かに害に優り、闇雲に恐れ避けるのは愚かなことと考えています。この紫外線は太陽光の中でエネルギーは最大ですが透過力は最小です。皮膚には、〇・五㎜以上は入りません。そのため他の波長域の光線より、皮膚の吸収量が多く刺激し易い反面、ビタミンDを始め様々な光産物を生成する作用があります。

ところで、特に皮膚科の医師が、日焼けのような皮膚に認める当たり前の所見の害をあれこれ論じ、人々の不安を書き立てています。しかし、日に当たって日焼けするから紫外線に対する皮膚防護層が出来るのであり、ビタミンDが造られるのであって、日焼けしてはならないなどと言うのは、憚りながら自然の成り立ちが分かっていない、と言っても過言ではありません。健康のことを少しでも考えるのなら、上手に日焼けする方法を教えるのが筋と言うものです。

紫外線は布でもガラスでも間にあれば殆どブロックされますので、それだけで過度の日焼けは防げます。この簡明な事実を心得ていれば、いたずらに太陽光を恐れることはない筈です。

過ぎれば迷惑

源実朝が、

時により過ぎれば
民の嘆きあり、
八大龍王、雨やめたまえ。

と歌いましたが、雨でも過ぎれば迷惑です。

同様に太陽光も、初夏から夏の正午前後の紫外線は強過ぎる面があるため、紫外線防止をセールスポイントにした商品が売られています。実は、過度の紫外線の防止を目的にした商品は昔からありましたが、近年の風潮は、紫外線を意図的に悪者に仕立て、使わないと大変なことになるかのよう宣伝することですが、これを信じると、健康を害し病弱に泣く危険な落し穴にはまってしまいます。

日焼け止めには化粧品よりキャディーさんスタイル

紫外線防止化粧品を使わないと、しみ、そばかす、皮膚がんになると脅かす、洪水のような宣伝広告の甲斐あって、紫外線防止化粧品は売れに売れています。この宣伝の偽善的な点については前に触れたので述べません。ただ不当に不安を煽って健康を損なわせるようなやりかたには怒りすら感じていますが、過度の日焼けを嫌って紫外線防止化粧品を使うのを止める気はありません。

紫外線防止化粧品で使われている、サンスクリーンあるいはサンブロック剤は、本来、紫外線による急性の皮膚障害を防ぐのが目的で、紫外線を完全にブロックする訳ではありません。最近、聞き慣れないSPFという言葉を使って、SPFが高いほど優れた商品のように思わせていますが、SPFとは皮膚に紅斑を起こす時間が化粧品を使うと何倍になるかを示した数値で、通常、紫外線に過敏な白人の場合、SPF6前後、黄色人種の日本人の場合はSPF3で十分なのです。その上、SPFが高いほど副作用の皮膚のトラブルが多発することも知る必要があるでしょう。

ところで、紫外線を完全に遮断するのなら、一番安全で確実なのは、帽子をかぶり、ほおかぶりをし、長袖の衣服をまとい、ズボンをはいて、手袋をする。そうです、ゴルフ場のキャディーさん愛用のスタイルです。これ以上のものはありません。

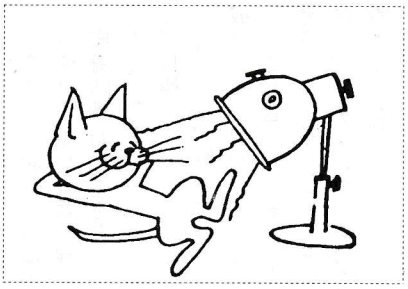
日傘は昔から紫外線よけ

何年か前、紫外線防止日傘が売られているという話を聞いた時、てっきり冗談だと思いましたが、紫外線防止ブラウスとか紫外線防止ストッキングだとか、外にも様々な紫外線防止商品があると聞き及んで、あきれてものも言えない気持ちになりました。

聞くと、紫外線防止のための加工には二通りあり、繊維に紫外線を反射させたり散乱させる微粒子を織り込む方法と、紫外線を吸収する容剤を使う方法があるといいます。こういわれると、成る程と納得するかも知れませんが、前述したように、そもそも布地は加工しなくても紫外線を通さないのです。この紫外線の特性が分かっていたから、昔から紫外線よけに日傘やパラソルを使ったのです。それが今ごろになって何が紫外線防止日傘なのか、笑止千万な話です。もしも紫外線を防ぎたいなら、紫外線防止加工するより、布地の繊維の織りを細かくして、透けて見えないようにするほうがはるかに優れています。

適度の紫外線浴を

最後に光線療法の宣伝をしておきます。少なくとも、年老いてから軽石のようなすかすかの骨の持ち主に成りたくないなら、軽く日焼けを起こす程度の光線浴は必ず実行してください。あなたの骨がそうなっても、あなたの責任であって、あなたを騙した広告主が責任をとることは間違ってもありませんから。



治験例報告

☆前立腺肥大症

症例　62歳　男性　会社役員

症状　三年程前から、就眠中にトイレの回数が増え、排尿の際、次第に尿線が細く勢いが弱く時間がかかるようになったが、病院には行かず放っておいた。約一年前、夕食後に尿意を覚えてトイレに行ったが尿が殆ど出ないため、驚いて泌尿器科で診てもらった。そこで前立腺肥大症と診断され手術を勧められた。しかし仕事の関係で休みがとれず、暫く投薬で様子を見ることにしたが、尿閉のような激しい症状は間もなく良くなった。

患者は十数年前に叔父が前立腺肥大症で幾度も手術を受け再発に苦しんでいたのを思い出したが、薬は一時抑えで副作用も考えられるし、その内、手術を受けるつもりでいた。そんな折に長年の付き合いで気心の知れた友人から光線療法を勧められて来所した。

身長162cm、体重70kg、頑丈な感じの体つき。

療法経過　BDカーボンで、会陰部30分、下腹部開放で10分、第一集光器を使用して10分、腰10分、ABカーボンで、足裏10分、膝10分照射した。翌日、尿の出方が良くなり続けたいと電話があったが、当所の都合で二日後から概ね初回に準じて治療した。四回目の治療の頃には、尿の出方が良くなったのがはっきり分かるようになった。その後、自宅での治療に移行したが、会陰部と下腹部と腰は日に二回照射するように指示した。

約一ケ月して来所した時には、放尿中に力むことが少なくなったし、出方が悪くても光線を照射すると良くなるのでトイレが苦にならなくなったと喜んでいた。半年後には、前のように排尿に勢いが出てきて全快したようだ、叔父のことを思えば、会社を休まずにここまで良くなったのは本当に嬉しい、サナモアに感謝すると言っていた。なお前立腺肥大症は老化に伴う現象の一つであり、日に一回は欠かさず照射するように勧めている。

神戸市　ウエノ光線療研
上野　健太郎氏報告
TELO七八－三三二－一三五八

☆膝蓋骨剥離骨折

症例　55歳　男性

症状　歩行中に大型バイクに後ろからぶつけられて前のめりに転倒、左膝を強打し痛みのため立ち上がれなかったが助けられて病院に行き検査を受けた。その結果、靭帯の牽引による左膝蓋骨剥離骨折と診断され入院を勧められたが、光線療法をしようと入院を見合わせ、その日の夜の10時頃帰宅した。

帰宅後、電話で照射法を問い合わせてきたが、左膝からすねにかけて激しく痛み、益々腫れたとのことだったので、明朝までも痛みが楽になるまでABカーボンで左膝の前後左右や下腿や足裏に徹底して照射するように指示した。その上で、もう一度診察を受けるように話したが、翌日、医師から不思議なほど回復していると言われたとのことで、しばらく当院に通院して治療することにした。

療法経過　治療には二台の光線治療器を用い、AB、BCカーボンを適宜使用した。まず側臥位で、腰と膝15分、膝裏と足首15分、腹と足裏15分、次に仰臥位で、側方から左右の腰と膝の内側に各15分、左右の膝の外側と足首に各15分照射した。

本例は病院で診察を受けながら治療を続け、50日後に医師から完治を告げられたが、その折に早く治ったことに驚いていたという。

川崎市　東京光線治療院
海渡　一二三氏報告
TELO四四－七二二－五〇六七

☆突発した頚肩腕障害

症例　48歳　男性

症状　朝起きたら、右頚部から肩から腕にかけて関節が硬直していて、手を上、前、後に動かそうとすると痛みがあってどうにもならない状態であった。そのため店を休業にして、食事もそこそこに光線療法に専念した。

療法経過　その日は合計10時間前後照射したが、前半の5時間はBCカーボン、後半の5時間はBDカーボンを使用した。照射部位は、後頭部から背部、右頚部から右肩関節、肩甲骨部の前後や周辺、肩関節から肘、手首の関節、とくまなく照射したが、終わる頃にはすっかり症状はなくなっていた。翌日は自覚的には症状がなかったため、平常通りに開店したが、家族が心配するので早目に閉店し、BDカーボンで3時間照射した。その後、数カ月たつが再発の兆しはない。

このように急に突発的に発症した場合、長時間照射の効果が如何に大きいかを目の当りに体験したが、患者は独りで光線療法を行い、全快したことを心から喜んでいた。

春日市　育美健康光線療研
前田　ミサ氏報告
TELO九二－五八一－二〇三九

サナモアカーボンの類似品にご注意下さい

サナモアA、B、C、Dカーボンは、その使用法を書いた著書「光線療法学」ともども愛用者各位の御信頼を頂き、全国津々浦々まで高い評価を受けておりますことは、皆様方よくご存知の通りであります。

ところが他社製カーボンに「光線療法学」をセットしたり、サナモアABCDと効果が同じという根も葉もないうたい文句で互換表を添付して販売している業者がいます。もとより、このような道理にもとる行為をする者が何時の世にもいますが、当研究所としては他社製カーボンを使用した場合の効果について一切の責任はもてませんので呉々もご注意下さい。

（サナモアカーボンには、製造元イビデン株式会社の商標－B－のマークが必ずついてます）

東京光線療法研究所

紫外線が足りないと花や実の色が悪くなる

―太陽が植物の成育に及ぼす影響―

サナモア光線協会　医学博士　宇都宮　光明

生態系とは

生物は常に外界の影響を受けていますが、同時に外界に影響を及ぼしています。この関係を一個の生物のように見る見方が生態系（エコロジー）です。即ち生態系には生物的要素として、植物群集（食物を生産する生産者）、動物群集（専ら消費する消費者）、微生物群集（生産する原材料にまで分解する分解者）が、非生物的要素として、光線、温度、降水量、大気などの気候要因、土壌、地形などの土壌要因が含まれています。

ここでは生態系のうち、光線と植物の関係を考えてみました。

緑の生命

野外で緑の生命、植物に囲まれ、降り注ぐ陽光を浴びていると、自然に人々の心を和ませます。殊に都会でコンクリートに囲まれ、大気汚染の下で暮らしていると、緑や清浄な空気が無性に恋しくなることがあります。この緑が、今、私たちが住む地球から急速に失われつつあり、〝緑を守ろう〟という自然保護キャンペーンが声高に叫ばれています。

緑を守るとは、植物を大切にすることです。ところで日本の見慣れた懐かしい緑の風景の一つに〝たんぼ〟があります。そのたんぼで作られる米の自由化はわが国の国論を二分する大問題になっていますが、この問題を論じる際に少なくとも植物群集の遷移について弁えておかなければならないと思います。

私どもの先祖は、田を耕し、潅漑用水を造り、主食の米を百%自給する大事業を成し遂げました。言い換えれば、自然界の平衡に人工的に手を加え、私たちに有利な人工生態系を残してくれたのです。しかし稲作を止め土地が裸地化すれば、まず種子が大きく初期成長の早いパイオニヤ植物（ブタクサやエノコログサ）に覆われ、次に地面に広がったロゼット葉を持つ植物（ヒメジョオンやマツヨイグサ）が茂り始めます。そして数年後には、ススキの原になるでしょう。このススキの草原は10年―20年でクヌギやナラの雑木林になり、50年後にはシイやカシの極相林になります。こうなってから稲作を再開しようとしても容易なことではありません。

世界的には食料難は深刻な問題です。稲作については、経済問題としてでなく、〝緑を守る〟運動の一環として考える必要があるのではないでしょうか。

太陽と生物

緑の生命、植物と私たち動物と比べますと、外見はもとより生物体としても全く異なると思われるかも知れませんが、神秘な生命現象を営む細胞の基本構造は驚くほど似ています。相違点は、植物の細胞には細胞膜の外側に細胞壁があり、細胞内に光合成に関係する葉緑体があること位です。この葉緑体にある葉緑素が太陽光線のエネルギーを利用して、無機物、即ち炭酸ガスと水からを有機物、即ち澱粉を合成する光合成を営み、全生物に酸素と食物を供給する食物連鎖の生産者になり、すべての生物の食物網を形成し、種族保存に寄与します。

食物連鎖だけでなく、自然界の物質循環はすべて太陽が中心です。この事実を本能的に察知したからこそ、古代から人々は太陽を崇拝し、太陽の恵みに感謝をしてきました。しかし、特に近年になって、人々は却って太陽に感謝することを忘れ、理解が足りないことを棚上げし、不遜になったと思うことがしばしばあります。

これまで随所に記述しましたが、すべての動物は食物では補えないビタミンDを紫外線の助けを借りて補っています。これこそ人知を越えた自然の摂理なのです。この極めて簡明な事実する分かっているか怪しい人が、太陽、特に紫外線の弊害を得々として論じています。無論、太陽のことを論じることは間違っているとはいいませんが、太陽について基本的な知識を身に付けた上で論じるなら、角を矯めて牛を殺すことにはならないのにと口惜しい思いをしています。

花や実が色付くには

数年前のことですが、植物の光合成に関わる作用波長は可視線であり、紫外線はむしろ有害である、と言い張る人とちょっとした論争をしました。この人が多少とも光線の作用を知っていることは認めますが、基礎的な知識が不確かと言わざるを得ません。

濃い紫色に染まったつやのあるナスは夏の風物詩でもありますが、昨今は四季を通して出回っています。しかし旬のナスと比べると、ビニールハウスで採れたナスは色つやともに見劣りします。そこで注意深く観察すると、同じハウス内のナスでも、中央部分のナスは色つやが悪く、入り口付近の自然光を浴びているナスの色つやの良いことに気付かれると思います。これはビニールハウスの被覆材料が紫外線を通さないことに問題があったのです。

既に今世紀の始め、リンゴの果実が赤くなるのに紫外線が影響することが報告されています。言うまでもなく、野外で栽培すれば自然に紫外線を浴びますから問題はありませんが、今では四季を問わずにビニールハウスで野菜や果物を栽培するため、被覆材料によっては紫外線を通さないために色つやが悪くなるのです。従って、ビニールハウスで栽培する際には、紫外線の透過性に配慮しなければなりませんし、余り汚れないように注意しなければなりません。前述のナスの場合は、着色の元になるアントシアン含量に近紫外線が大きく影響することが明らかにされています。

その上、光の総量も大切です。野外で栽培された旬のものを旬の時期に食べると、必要にして十分な光線を浴びているため美味しいのです。これがハウスものになると、光量が不足し成育が悪くなりますから、値段が高

〈六ページにつづく〉

〈五ページからつづく〉

い割に味は不味いとしても当たり前です。例えば夏の果物のスイカを春に食べても美味しくないのは光の量が足りないからです。このように美味しそうな色つやの果物を栽培するにも、あるいは奇麗な花を咲かせるにも、紫外線は不可欠なのです。

植物の病気

「今年の作物の出来はどうかね！」

「こうお日様が照らなくては、病気が多くてさっぱりだわ」。

農家の人の会話が聞こえるような気がします。植物は動物と違って、「痛い」とも「苦しい」ともいいませんが、この会話から分かるように、植物にも動物に負けないくらい沢山の病気があります。私たちと同じように光線不足で顔色が悪くなり、味も不味くなることは前述しました。勿論、かびや細菌やウィルスによる伝染病にも絶えず脅かされています。栄養失調や栄養過多もあります。大気汚染などの公害病には動物より敏感に反応します。

植物は絶えず根から水分と無機物を吸収し、葉は太陽エネルギーを精一杯利用して、光合成物質を蓄え、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を結ばせています。このような新陳代謝が活発に行われていれば抵抗性がありますが、何らかの原因で乱されますと、生命現象に狂いを生じ、葉は萎れ、花は咲かず、実はなりません。このように植物が病気になって収穫がなくなれば、食料問題一つとっても大変に困る事態になります。

植物の病気はどんな時に多いか、昔から大飢饉が起きた年は、天候不順、日照不足と相場は決まっています。米どころでもいもち病の大発生で再三再四にわたり大きな被害をだしていますが、その最大の原因は日照不足です。いもち病は日照不足に加えて地温が低下し、稲のエネルギーを左右する光合成作用が抑えられ、糖やタンパクが減少し、原因になるかびに対する抵抗力が低下し、これに長雨が加わってかびの胞子の発芽を促し、感染力を高めた結果起こります。

植物の抵抗力

生物は厳しい環境の中、互いに競い合って病気に負けないように精一杯生きています。私たちは日光浴が風邪に負けない抵抗力の源になることを知っていますが、この効果に紫外線を浴びると出来るビタミンDの作用が関わっています。これと同様な作用は植物にもあります。

病原菌の感染を受けた植物は、菌の発育を抑制する様々な抗菌性物質を生じますが、これらの物質を一括して、ファイトアレキシンといいます。このファイトアレキシンが紫外線照射でも形成されます。換言すれば、紫外線が植物の抵抗性を高め、病気になることを防ぐのです。このように植物は何時も太陽を恋しがっています。

自然界と共存共栄

人類が自然に背を向けて、衣服をまとい、家屋の中で暮らすようになって太陽を失い健康を損なったように、植物がビニールハウスで栽培されるようになって太陽を失い抵抗力が弱くなりました。その上、適温適湿のハウス内では病原菌が年中繁殖しますので、ますます植物の病気が多くなりました。

地球の生態系は、自然環境の変遷に応じて移り変わりはありましたが、少なくとも人類が誕生する以前は平衡を保ってきました。然るに、人類はすべての天敵をねじ伏せ、人口の著しい増加を招き、物質文明を追い求めて自然の生態系を破壊し荒廃させました。その当然の帰結でしょうが、人類が生存するには自然界との共存共栄しかないことにやっと気付いたのです。

植物についても、農薬だけに頼らない綜合防除法で、病気に強い植物を育てることが望まれますが、やはり自然に逆らわないことが大切です。大体、人間が自然にたいして何かをするとロクなことはありません。自然の摂理を壊しては何も生まれません。

サナモア

Sanamore

サナモア光線協会

趣意書

天地創造の昔から、真の光、即ち太陽光線は、私たちに限りない恩恵を与えています。サナモア光線療法は、この太陽光線の健康増進、疾病予防および治療効果を利用した治療法です。従って、目に見える可視光線だけでなく、目には見えないが無くてはならない紫外線や赤外線を目的に応じて適切に放射しなければなりません。

このサナモア愛用者を以て、光線療法の研究を行うと共に、啓蒙　普及活動を行うためサナモア光線協会を設立しました。

サナモア光線協会は、設立の趣旨に賛同載いた会員にて構成し、季刊紙「健康と光線」を発行します。

サナモア光線協会
医学博士　宇都宮　光明

協会では、会員を募集しております。
入会希望者は、左記宛御申込み下さい。
〒153　東京都目黒区目黒4—6—18
サナモア光線協会TEL(03)三七九三—五二八一
三七一二—五三二二

（本紙の無断転用を禁止します。）